

法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第６６回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

**誰かがいるから**

秋田・中村　真実

　環境と私たちは切っても切り離せない関係にある。よりよい環境の中にこそ，私たちが安心・安全に生活できるヒントが隠されているのではないかと考えた。

　例えば，夏休みに行ったリサイクル活動。集められた古紙や空きビンはごみとして扱わず，次の資源としてまた生きる権利をもらい，人の役に立つ資源となる。さらに資源を再利用することで今ある環境が守られるだろう。川のそばでは太陽と豊かな水と土により，花のつぼみがたくさん育っていく。花は咲く権利を与えられるのだ。花は咲く場所を選べないけれど，どんな場所でも，どんな色でも，たとえ人々に愛されなくても，その花には生きる権利が与えられるのだ。

　そして，私は自分が生活する環境，家族のことに目を向けてみた。友達はおじいちゃんおばあちゃん，お父さん，お母さん，兄弟の話をする。けれど，私には母と，東京に住んでいる祖母と，九十歳の少し忘れっぽい曾祖母がいるだけ。加えて，父と母は離婚しているので，時々プレゼントを贈ってくるだけの父だ。母は，少し頼りないけれど，優しくて私としっかり向き合ってくれている。東京の祖母は明日への励ましと，今日のねぎらいの言葉をくれる。曾祖母もいつも私たちのことを思ってくれている。

　私は他の家庭と比べると少し満たされていないのかもしれない。少し寂しい時もあるけれど，寂しさの分だけうれしさがある。苦しい分だけ，幸せがあると思いながら生活している。

　そんなある日，一つの言葉に出会った。

「ひとりの子どもの涙は，人類すべての悲しみより重い。」

　ある本に載っていたドストエフスキーのこの言葉は小さくささやき，私の心を奪っていった。「ひとりの子どもの涙」とは，いじめのためなのか。差別によるものなのか。それとも戦争によって流した涙なのだろうか。様々なものによる悲しみが表れていると私は感じた。これが自分だとしたら，人類すべての悲しみよりも重いといえるのだろうか。

　最近，恐ろしい事件のニュースをよく目にするようになった。いじめによって自ら命を絶ってしまう事件や，中には中学生が犯罪者になってしまう事件も起きている。私が今生活しているクラスの様子を見ていると，そのような事件を起こすことなどとても考えられないと，強い衝撃を受けた。なぜ，人が人を殺してしまうのか。地球上に同じ権利をもった人間として生きているのに。このような犯罪がない世の中を作ることはできないのだろうか……。

　私は，小学校三年生の春に，それまで住んでいた街からこの東成瀬村に転校してきた。「新しい学校で上手くやっていけるのか，前の学校に戻りたい。」という不安な気持ちで初日を迎えた。しかし，自己紹介を終えると，何人かの新しいクラスメイトが私の方に駆け寄ってきてくれた。その時，恥ずかしい反面，ホッとした気持ちになり，さっきまでの不安はあっという間に吹き飛んでいった。

　住んでみるとこの村の人たちは優しさにあふれていた。例えば，一歩家から出ると，にこやかにあいさつを交わしている。行事があると参加を呼びかけてくれたり，会場に行くと気軽に声をかけてくれたりもする。また，冬になると隣の家の方が，雪寄せを手伝ってくれるなど，たくさんの関わりをもつようになっていった。私が以前住んでいた街はたくさんの人が住んでいたが，隣近所にどのような人が住んでいるのか，顔も名前も全くわからなかった。私は今年，十三歳になる。以前の街で暮らした年月ほど，この村での時間は過ぎていないが，この村に来てからの思い出の方がずっとたくさんあることに気づいた。

　考えてみると，東成瀬村に来て周囲の人たちがありのままの私を受けとめてくれたことで，本当の自分の姿を出せるようになった気がする。この私が経験した地域の方々とのふれあいが，この世から犯罪をなくすためのヒントになるのかもしれない。人が心にもっている優しさこそ，犯罪をなくす一つの手段ではないだろうか。人を気遣う心，それを受けて感謝する心など，人と人とのつながりがあれば，もっと誰もが安心して暮らしていくことができるはずだ。

　資源は何度も人の役に立ち，きれいな花を咲かせる手助けになっている。人間も，苦しいことや辛いことがあっても，何度でも立ち直れるのだ。自問自答しながらも，周囲の人たちとのつながりを感じ，自分らしく生きる道をみつけることができるだろう。「ひとりの子どもの涙」が一滴もこぼれ落ちないように，人の心に優しさという名の花を大事に育てていきたい。